

日記に見る三田村鳶魚の資料収集

江戸時代に関する制度・風俗などについての考証で知られる三田村鳶魚(一八七〇—一九五二)は、いったいどのようなようにして資料を収集し、記録し、それに基づく研究を成し遂げることができたのか。膨大な成果は読む者を圧倒するが、その秘密の一端を解き明かしてみたい誘惑に駆られる。ここでは、鳶魚の日記を読み解くことしかできないが、そこからいくらかなりともそのヒントを得てみたい。

散逸した年代を除き、現存する鳶魚日記は全集の三巻を費やして収録されている。¹ 明治四三年から昭和二四年にいたるまで、日記はほとんど同じスタイルで書かれている。長年にわたる日記の場合、途中で書く内容や形式が変わるのが普通であるが、四〇年近い間に彼のスタイルはほとんど変わっていない。年齢でいえば、四〇歳代から八〇歳代であるから、人間としてはすでに完成していたためとも言えそうだが、それにしてもこの一貫性には驚嘆を禁じ得ない。しかし、これは彼の業績を併せ見ると納得できるものがある。

日記には、自身や家族の消息、人の往来、買った本、読んだ本などが詳しく記されているが、本稿では、資料の収集、図書館等の利用、読書記録といった事象について見ていくことにする。

中西 裕

一、資料の購入

資料の収集には、購入、寄贈、貸与などの形態がある。鳶魚の場合、対象とする資料は新刊書よりは古書、それも和本が中心であり、したがって主な購入先は古書店である。古書店として名前が一番多く記載されているのは、一貫して吉田書店である。その点について、能・舞踊研究家、松本亀松の証言がある。

私は中学生のころから下谷の吉田書店によく行っていました。吉田という本屋は浅草にも浅倉屋という屋号のがあって、それぞれ通称「下吉」「浅吉」と呼ばれていました。「下吉」の主人吉田吉五郎は、俳書の知識ではたいへんな大家でした。「中略」三田村さんも、よくこの吉田に来ておられたので、存じあげたわけでした。²

吉田書店は枚挙に遑がないほどの頻度で登場しているが、最古の記録はいつか。自身の購入かどうかを問わなければ、明治四三年二月に「千紫万紅を平へ郵送することを吉田書店に頼む」³の記事がある。明治四四年一月八日の条には「吉田書店より謄本二冊借入」⁴の記載があり、そのときに借

用した資料は、一月一九日の条に「吉田へ謄本二冊返却⁵」と書かれていて、すぐに返却されている。このやり取りにも見られるように、鳶魚と吉田書店とは単なる客と古書店という間柄にとどまるものではなく、ほとんど家族同様のつきあいであった。売り物のはずの古書を持ち帰って写すことまで許されている。これが鳶魚にとっての情報源の一つであった。

売り物を写したと明記されている例を挙げると、同じく明治四四年五月十一日条に「吉田書店ヨリ竹山先生答問書三冊借受ケテ帰ル⁶」とあり、五月二十一日、「竹山答問書第一巻八十四枚写了、是ハ闕本ナレド吉田ガ親切ニ貸シテクレタルモノナリ、ナカナカ面白キコト多シ⁷」、六月二日条に「竹山答問書第二冊八十四枚贍写畢⁸」、七月八日条に「竹山先生答問書卷七贍了、紙数九十三張、製本ヲ伊東へ頼む⁹。」とあって、この場合にはかなりの日数をかけて写本がなされたことが知られる。返却の記録も書かれることが多いが、この場合のそれは見つけれられない。写し終った翌日に鳶魚は吉田書店を訪ねて「官板目録ヲ貸ス¹⁰」という記事があるから、その日に返却がなされたとみるべきであろうか。

吉田書店は、研究の面でも鳶魚にとっては大切な役割を担った。書物の書誌的事項についての助言は商売柄お手の物だったから、鳶魚がしばしば有益な知識をそこから得ていることが日記から理解される。一つ例を挙げると、次のような記事が見られる。

○吉田の話に、経済叢書の三貨図彙も夢の代も抄本にて完本にあらずと、然らば一言の断もせず刷行せし、滝本氏は不徳人なり。¹¹

饗庭篁村没後にその蔵書を引き取ったのも吉田書店だった。そのことを知ると、鳶魚はさっそく出かけて行き、「全価格千八百円なりしに丸本古

浄瑠璃芝居もの等を見合せたれば千二百円だけ引取りたりといふ¹²」との事情を聞き、饗庭家を訪問し、引き取られなかった丸本を、夕食まで供せられて閲覧している。¹³

その他によく利用した書店を列挙してみる。明治末期から大正期にかけて名前が示されるのは、「三田喜」、「本郷田町尾張屋」、「文行堂」などが、明示されない「四谷ノ本屋」のほか、「途上の出店」、「上野広小路の露店」、「露店」での購入もしばしば見られる。「古書展覧会」での購入もあるが、店名が何も書かれていないことも多い。

昭和に入っても、「吉田書店」はあいかわらず多いが、「細川書店」、「文淵堂」、「玉川堂」、「海野書店」、「森江書店」、「山本書店」、「村口」、「白雲堂」、「琳瑯閣」、「明治堂」、「大屋書店」、「一誠堂」のほか、「大阪積徳堂」、「名古屋の「松本書店」など多くの古書店の名前が挙がってくる。白木屋や新宿三越などのデパートの古本市での購入もある。

二、資料の貸借

近世には図書資料を貸し借りすることはごく普通に行われた。版本でも印刷部数が少なく、まして写本での流通も多かった。いっぽう今日のような図書館施設が普及する前の時代であるから貸借によって読むことは珍しくなかった。明治以降の時代でも和本については貸借によって読むのがごく一般的であったのである。

鳶魚の場合も友人間で書物を流通し合うことがしばしば行われている。日記には購入した資料とともに、貸借資料名もかなり詳しく記述されている。しかし、記録された資料がそのすべてではない。日記からその記述を抜き出して検討してみると、借用が記されていても返却の事実が書かれて

昭和三年の貸借記録

書名	貸借先	貸借などの種類	年月日	備考
武野演路 三冊	波多野賢一氏へ	返済	昭和3. 1. 8	
富士御料の書類	井野辺茂雄氏 [へ?]	返済	昭和3. 1. 22	
享保御成敗式目	柴田宵曲氏 [から]	貸出	昭和3. 1. 27	即夜より写しもの 2.6 享保御成敗式目写し畢、 2.8 金価日月燈 (明和四年版)、享保御成敗式目 (写本) 各一冊返送
金価日月燈				
難養南柯夢	井野辺氏へ	貸す	昭和3. 2. 5	
猿家職亀鏡旧記	山本節氏へ	頼む	昭和3. 2. 14	
地藏堂通夜物語	夏秋氏へ	頼む	昭和3. 2. 14	5.27 夏秋氏細君、持参 7.2 吉田より地藏堂通夜物語届く、是も抄本なり
風俗図会 第一冊	木村氏 [へ]	貸す	昭和3. 2. 15	
江戸鹿子貞享版	若樹氏から	借入	昭和3. 4. 6	4.11 返し
かくれんぼ	吉田書店 [から]	借用	昭和3. 4. 8	4.11 写了
芝居年代記 二冊 一冊 [書名なし]	柴田氏へ	持たせて遣わず 貸出を頼む	昭和3. 4. 10	
今様和談色	林若樹氏 [から]	借りて来る	昭和3. 4. 11	5冊物大阪板にはあれど奥付なければ刊年とも知れず、小説年表にもなし
芝居年代記 三冊	柴田氏より	届く	昭和3. 4. 12	4.24 返送
公侯熙績	波多野氏まで	返す	昭和3. 4. 23	
駿国雑志	共古翁へ	返済	昭和3. 4. 23	
薩摩大夫芝居図考 写本	島田一郎氏	持参	昭和3. 4. 24	
十寸見編年集	筑波氏へ	返送	昭和3. 5. 1	
璣訓蒙鏡草	山田氏 [から]	恩貸	昭和3. 5. 7	
璣訓蒙	坂上氏持参、米山堂使に	渡す	昭和3. 5. 14	5.30 坂上氏写し、原本とも持参 6.13 米山堂つかひへ璣訓蒙返済 7.12 製本成りて、米山堂より届く
塩野所左衛門筑井県紀行詩集 一冊	天野佐一郎氏より	恵送	昭和3. 5. 29	
雪の降道 二冊	柴田氏より	届く	昭和3. 5. 30	
近世淫乱集	紙魚社より	届きあり	昭和3. 6. 8	
近世淫乱集	名古屋より	届く	昭和3. 6. 9	
小夜衣	水谷氏へ	貸す	昭和3. 6. 9	
近世淫乱集	岡戸氏へ	返送	昭和3. 6. 15	
小唄打聞	喜多村進氏に	貸出して貰ふ	昭和3. 6. 25	6.27 返す
文政夢物語	筑波子より	当分借用	昭和3. 7. 3	
根笹の雪	山田弥三郎 (博文館) [へ]	貸す	昭和3. 7. 7	
随筆 十八冊	郷雲巖 [へ]	貸す	昭和3. 7. 8	
西宮昔噺	忍頂寺氏より	恵送	昭和3. 7. 9	
膝栗毛の袋、名女情比	水谷氏へ	返済	昭和3. 7. 24	
集古合本 1冊	斑山氏 [へ]	送る	昭和3. 8. 8	
日本演劇研究 第二集	林氏へ	貸す	昭和3. 8. 12	
松山川越記	柴田氏へ	渡す	昭和3. 8. 12	
饗庭篁村集	島あり	持参	昭和3. 8. 13	
和談色	林氏へ		昭和3. 8. 18	
篁村叢書等一括	山田氏へ		昭和3. 8. 18	
胸算用	山口剛氏 [から]	持参貸与	昭和3. 8. 18	
一実神道記、同相承、口決深秘 計三冊	堯穎僧正 (上善寮隠栖) [から]	借用	昭和3. 8. 30	
天保新政録 四冊、醇堂漫抄 1冊 計五冊	喜多村氏へ	返す	昭和3. 9. 1	[9月17日から10月31日 にかけ醇堂手抄などを南葵 文庫あるいは喜多村氏へ返 済の記事あり]
御家騒動 一冊	天野利勝外一人	返す	昭和3. 9. 25	
狂歌人名辞書	野崎氏より	到来	昭和3.12. 6	
日本経済史研究 一冊	東朝へ	返送す	昭和3.12.12	
蕎麦道中記	興文社今田謹吾 [より]	借用	昭和3.12.18	

○他にも不明な記述は多いが、明らかに貸借とみなされるものに限定した。

いないことはざらにある。逆に借用について書かれずに、いきなり返却のことが書かれている場合もしばしばある。詳細な記録とはいっても、すべてを記述しているわけではないことを知らねばならない。昭和三年の貸借関係記録を抜き出して、その例としておく。(前頁参照)

見ると、借用と返却が対応して記述されていることはむしろ少ないことがわかる。『近世淫乱集』は一日違いで二冊届いているように見えるが、別本なのか、重複して記述されたのかは不明である。『璣訓蒙』は日記の記述からは、どのように行き来しているのかがまるでわからない。

また、「恵与」と書かれているから寄贈を受けたのかと読むと、後に「返済」の事実が記されることもあり、「到来」は借用なのか寄贈を受けたのか判断できないものもある。日記の短い記述から事実を知るのはむずかしい。

また、借用先の名と返却先の名が一致しない記述も多い。図書館などの機関から借用した場合に、返却先としては、その機関の担当者の個人名が書かれていたり、あるいは別人に托して返却したりするような形態のときにそれが起こる。また実際には転貸で、最初の貸出者に直接返すケースも見られる。詳細な研究は今後の課題である。

日記の記録は不完全なものであるが、そのいっぽうで、借用した資料、貸出をした資料についての記録は正確に取られていることが日記からうかがわれる場合がある。したがって、日記とは別に出入りの記録が取られていたことが推察される。

借用した資料は用が済み次第返却していることを想像させる記述が多いが、時日がたってからの返却もあり、たまには督促を受けていることもある。「酒井家史料」について、昭和四年一〇月二五日条に「服部氏」から

「返済方申来ル」¹⁴とあって、翌々日に返却しているのは後者の例である。

借用した資料についてはすぐに読んでいることが多く、また写している記述も非常に多い。そのことには後で触れる。

借用するにしても貸出するにしても、どのようにしてその所蔵を知ったのか。図書館のような機関の場合には目録を見てその情報を知ることがあるのは当然だが、個人の場合には人伝で、つまり人と人との間のコミュニケーションによって知ることが多かった。

碧梧桐氏ノ紹介ニヨリ上根岸八ニ陸義猶翁ヲ訪ヒ、本朝河功略記、疏淪提要ノ有無、お美代ノ方ノ墓所、津田鳳卿ノ伝等取調方ヲ懇求ス。¹⁵

右は、大正二年四月一三日の記事であるが、鳶魚の「懇求」をめぐってであろう、続く一五日に先方からの着信、一七日に鳶魚の発信、一九日と五月九日に着信がある。求める書物が入手できたのかどうかは不明だが、所在についてもこのようにして探求していったという一つの例になる。

前月、文芸春秋に浜田風俗変のこと書きたるに、浜田町立図書館、早稲田大学学生より現本所在問合あり、文理科大学所蔵の旨返事。¹⁶

竜興寺へ頼みたる駒沢大学蔵本護仏神論のこと、松崎天胤氏問合せくれたるに所蔵なしと、如何にも此方心得違にて文理科大学所蔵なりし也。¹⁷

といった例に見えるように、個人だけでなく図書館からも所在の問い合わせを受けたり、個人を介して大学に所在を確認することもあり、試行錯誤を重ねていると言ってよいであろう。

三、図書館などの利用

鳶魚が利用したとして機関名を挙げた図書館は多い。主なものだけでも、帝国図書館、南葵文庫、教育図書館、帝国大学、東京図書館、早稲田大学図書館、日比谷図書館、史料編纂所、内閣文庫、成田図書館、東洋文庫、文理科大学、商科大学、慶応大学図書館、岡山県立図書館、尊経閣文庫、静嘉堂文庫、東洋大学、駒沢大学図書館、京城大学図書館、蓬左文庫などが挙げられる。

これらの図書館を鳶魚は利用し、しかも多くの場合に書物を帯出している。研究機関に属していたわけではない彼がこのような利用をすることができた一つの理由は、幅広い交友関係があったからである。

帝国図書館については、図書館優待券を得たの利用であった。鳶魚は新聞記者として活躍したのちに政教社の正社員となった。この地位に就いた年については、明治四三年説と大正三年説とがあり、どちらとも決められないとされている。¹⁸ 正社員となったことで帝国図書館を使う便宜が図られたという。

では、彼が優待券を得たのはいつか。帝国図書館であることが確実な「図書館」を明治四三年以降に利用していることが日記に頻出する。その日記の明治四三年四月二七日条には「図書館優待券書替（政教社員）」との記載があり、¹⁹ この時点で彼が政教社員であり、優待券を入手できていることは動かせない。よって、再入社の可能性はあるとしても、大正三年に初めて政教社員となったとの説は成り立たない。ただ、優待券には当然期限があり、そのために書替が行われたことを示すのだろうが、入社と書替が同じ四三年という点には疑問が残る。

その後、明治四五年一月二八日条に「帝国図書館優待券を河東氏へ渡す」²⁰とあり、ここで一旦返却をしている模様である。河東は政教社社員だった碧梧桐であろう。次に優待券のことが記されるのは同年五月一日で、「河東氏より図書館優待券を請取る」²¹とある。書替にこのように長い時日がかかるものかと疑われるが、何らかの事情で遅延が生じたようで、この約三カ月の間、鳶魚が帝国図書館を訪れた記述は見られない。

大正元年一〇月九日条に「鈴木氏へ金五円渡し、図書館帯出券調製ノコトヲ頼ム」²²、その一週間後に「鈴木氏来訪、図書館帯出券出来たりとて持参」²³の記事が見える。鈴木氏はしばしば鳶魚の家を訪ねていた鈴木南陵のことであろうが、これは明治四五年と同年のことであり、通常の更新ではないと思われる。次の記事のように紛失などの事情があったかもしれない。

ずっとあとの昭和四年六月一〇日には、「夜、山田清作氏に往き、井上亀六氏に至り優待券再下付方を頼む、紛失に依つてなり」²⁴との記載がある。同月一五日に優待券再請求のために鳶魚は帝国図書館を訪れるが、土曜日だったため、「役人半ドンニテ居ラズ」²⁵との事情で請求がかなわず、一七日に再訪している。

さらに時代が下って、昭和一四年五月一九日に「柴田氏より図書館優待券、満月会筆記届きてあり」²⁶と記されていて、柴田宵曲から優待券を受け取っている。こののちも、翌年六月五日には「政教社より図書館特別閲覧券の書替の分送付」²⁷、一六年七月一七日には「柴田氏より図書館通券漸く届く、大変世話をかけたなり」²⁸とある。

戦後になって図書館の名称が変わり、国立国会図書館に統合される直前の時期にも、「帝国図書館本を引出すより外に道なきに至る、昨年より此

事を思案する間に、小川が上野へ勤める事になりたるゆゑ便宜を得たり」と「神代本義箋」の利用ができる喜びを表現している。小川は奥野信太郎の紹介で訪ねて来ていた慶応の学生小川恭一のことであろう。³⁰

その他の図書館利用についても人脈を駆使している。帝国大学を利用した際には、「日南丈人紹介状持参」のうゑ「三上博士に面会」して上杉年譜の抄録を行った³¹、すなわち、同じ政教社の福本日南の紹介状を持参して三上参次を介しての利用を果たしたものである。

もっとも、このときにはあまり良い思いをしなかったと見えて、次のようなことを後に書いている。

三上さんが御世辞つかひであるといふことは、随分際立つた甚しいものであった。「中略」福本さんが赤穂義士の事を調べるに就て、いろいろ材料を彼処で求められた。その時は三上さん自身先に立つて、資料を集めてくれたさうである。お前も何か見たいものがあるなら、彼処へ往つて見せて貰つたらよからう、紹介状を書いてやるから、と福本さんが云はれるので、史料編纂所へ御たずねした。さうすると福本さんの紹介状があるから、今度は見せるといふ事で、上杉家の記録を見せてくれた。これは秘書でも何でもない、上杉伯爵家へ往つても見せて貰へるものである。猶それに関係のあるのを、だんくく見せて貰ふつもりであると、幾日こゝへ来るつもりか、と聞かれた。「中略」図書係と云つたところで、人が多くゐるわけでないから外来者は困る、二三日で切上げて貰はなければならぬ、といふ話であった。³²

長くなるので以下は略すが、このあと、さらに事情の説明が書いてあり、三上への不満が書き連ねてある。そして、こう文章を閉じている。「御世辞つかひの極めて上手な三上さんは、自分に対する御世辞も亦上手な人で

あつたと思ふ」。³²

東洋大学の利用については「郷氏」の協力があり、³³早稲田大学図書館では具体的に名前が挙がっている館員は坪内逍遙の甥、坪内大造である。逍遙とはもう少しあとの時代に密接な関係が出来、そこから河竹繁俊との関係も生まれる。それに先立っては逍遙に近い山田清作の仲立ちがあつたのだろうか。

日比谷図書館では波多野賢一の名前が挙がり、³⁴今沢慈海館長とも閑談をしている。³⁵駿河台図書館でも波多野賢一を訪ねている。³⁶いずれも当時の図書館界では著名な人物である。

静嘉堂文庫はどうか。日記の大正一〇年六月二三日条に「山田清作氏より三菱文庫同行の時日を問ひ合せあり、二十五日と答ふ」³⁷とあり、実際にその日に訪れている。この三菱文庫が静嘉堂文庫だろうと考えられる。ところが、後年、そこを利用しようとしてなかなか果たせず、昭和一八年五月二一日に「人頼みは効なしと知り、緯字源流興廃考謄写願を静嘉堂文庫へ送る」³⁸と自記したように、利用を直接願い出て許され、二六日に行つて写し物をした。

蓬左文庫では「森、所両氏を訪ひ」³⁹、資料を閲覧している。森銑三ら身近な仲間の存在があれば、心強いことであろう。

東洋大学に関して、昭和二三年九月二八日に次のような記事が見える。「吉田幸一氏つかひ、東洋大学嘱託証明書届く」⁴⁰。この年六月二四日に東洋大学の町田二郎が西鶴についての講演を依頼してきた。鳶魚はこれに応じ、七月八日に三時間の講演を行った。そのことがあって嘱託証明書が届けられたものと思われるが、このあとに東洋大学で資料を閲覧したという記録は見当たらないようである。

鳶魚の場合には、専門分野から図書館以外の施設利用も多い。中では寺院での資料閲覧が特徴的である。伝法院、吉祥院、大聖院、足利の長林寺、凌雲院、竜興寺、寛永寺などの各寺院について資料閲覧および借用が行われている。このうち伝法院については、大森亮順僧正の⁴¹、寛永寺では大照晃道師の斡旋で資料を閲覧することができた。⁴²

さらに、個人を訪れて資料を閲覧する例も見られる。幸田成友、杉山元次、牧野貞寧、河津祐賢、黒川真道、浅野長武といった人たちを訪ねて、資料の閲覧を果たしている。中でも昭和一八年六月の記事が注目される。五日に第六天町の松平子爵邸に逸見家令を訪い、蔵書閲覧を求め、翌々日午後一時再往の約をとり、訪ねている。この後断続的に計一日間邸を訪問して「家世実記」を読んでいたが、七月二日に翌日限りで打ち切りたいと通告された。これに対して「華族らしき態度なり、逸見家令が面倒がる様子なり、無抛帰宅後礼状を出し、今日限り行かぬことにせり」と⁴³鳶魚は書いた。華族の邸で、研究のためとはいえ、これだけの長期にわたる閲覧は常識をはずれているかもしれない。

この時代、資料の所在を調べるのは至難のわざだった。そのため、つぎのごとき失敗もある。「吉田澄夫氏を訪ひ、先般頼みたる文理科大学図書館の扶桑護仏神論のことを聞く、色々世話してくれし様子にて全く蔵本なきこと知れたり、又間違なり」⁴⁴。

個人から往時の様子を聴き取る作業も鳶魚は行っており、その著『御殿女中』が一三代将軍徳川家定の御台所の中臈を勤めていた村山ませ子からの聞き書きを基にしていることはよく知られている。聞き書きは大正三年から九年までの長期にわたって行われた。⁴⁵鳶魚は別の人物からも聞き書きをしようと努めたいらしいことも日記によって知られる。大正五年一〇月二

七日条に「吉見みさと云フ老女ヲ訪フ、輪王寺御坊ノ状ヲ携ヘ往ク、尚面会ヲ断フル、前回ニモ同様ナリ、今ハ絶望ス、此老女ハ静寛院宮御中老ト聞ク」⁴⁶と、いかにも残念がる記述が見える。断られた同日、彼はまた「村山老刀自」⁴⁶を訪ねている。

四、読書記録

日記には読書記録が記されている。しかし、ほとんどは書名を挙げて、読了と書く程度の記述にとどまる。ときどき感想を漏らすこともあるが、例外に属する。『日本及日本人』に連載され、のちに『大衆文芸評判記』、『時代小説評判記』にまとめられた批評を口授するにあたって、当時の代表的な時代小説を読まなければならなくなったときには、その例外が多くなり、しかも当人はうんざりしながら読んでいる様が日記に如実にあらわれていて、批評には憤りが表現されていることを知る。

口授のため富士に立つ影をよむ、ウンザリなり、飛んだ約束をなせしを悔ゆども、遅し。⁴⁷

鳴門秘帖といふ怪しからぬものを読む、柴田氏へ口授のためなり。⁴⁸

けふ、迷惑なる読みもの続く。⁴⁹

先日來、折角のすすめに断りかね、大衆文芸評判記をつづけることはしたれど、何分読む気になれず、今日余儀無く、大菩薩峠をよむ。⁵⁰

この種の一連の例外を除けば、実におびただしい和本を読み、しかし、感想などを記すことはそれほど頻繁でない。⁵¹

読むのが速かったらしいことは、日記からも窺える。入手したその日に読了したことがしばしば書かれている。例を挙げると、「四谷の本屋」で代金未済で手に入れた書物、「止観大意十銭、眼橋新話四銭、唐律賦鈔八銭」のうち「止観大意読了」と、その日のうちに読了していることが書かれる。この種の例は枚挙に遑がない。

同じ本を何度も読んでいることも日記から知られる。

雲伝神道をよむ、二度目なり。⁵³

三河物語読了、重読して亦新なるが如し。⁵⁴

牛頭法門要纂重読すむ。⁵⁵

集義和書一より五まで繰返しよむ。⁵⁶

俗神道大意読了、要用ありてくり返しよむ。⁵⁷

程書抄略一渉了、抄出するまでには猶幾回読むべきか⁵⁸

明治四五年一月一日に林若吉が平秩東作の「蝦夷紀行」を所蔵しているのを知ると、二月八日に『東遊記』を借り受けて来て、「即夜著作の筆を贍写の筆となす」と書いている。自分で書いているように、まさに「読まずに書くことは食はずに働くに同じ、戒むべき事なり」⁶⁰で、鳶魚にとって資料が重要だったことが知られる。

「鳶魚は書物の書写をしており、また大量の抜書を残した。

恰も上西氏より神阿決真論を郵寄貸与あり、久しく見たく思ひし書なれば甚だ嬉し、直に筆を引いて贍写す⁶¹

神阿決真論が東大寺図書館にあることを知った鳶魚は、ちょうど鈴木南陵が奈良へ行くよしを聞き、写す依頼をしたところ、旅の間にその時間を

つくることに難色を示されたために断念していたものだった。その経緯とともに鳶魚の喜びが示されているのだが、このように旅に出る際に書写の依頼までしている。

書き写すことは本人だけでなく、他人にも頼んでおり、知友や八重夫人の手も借りている。

夜鶴岡春三郎氏写物を頼む⁶²

尾上金城氏を招き写し物を托す。⁶³

夜北野氏写しもの持ちて、雨を冒して来る。⁶⁴

樋口二葉氏写物たのむ。⁶⁵

今給黎生を呼び写しものを頼む⁶⁶

八重の写したる藤岡屋日記校合。⁶⁷

北野氏は北野博美であろう。校正なども頼んでいる身近な人物の一人である。「終日抄書」といった記事が数多く見られる。写本は体力的に負担が大きかっただろうことが想像されるが、「目の加減により昨日より写し物を休む」⁶⁸と具体的に記された事実もあり、協力者が必要だった。

周辺の人物に対しては写しものの謝礼をどうしたのか未詳だが、料金を払って依頼している例が見られる。

中川兼共氏代人来る、先日物の写し物の料金請求なり、此写し物はだめなり、

鈴木氏へ談合の上何とかすべし、持帰られてもよしと答ふ。⁶⁹

会津、林毅氏より写し物届く、四十五枚、送料、紙代共金六円送付の積り、
発送了。⁷⁰

これに先立つ七月九日の条に、「若松図書館、林毅氏へ日新館蔵書目中の旧事本紀冊数問合せ」⁷¹とあるから、その写しが届いたのであるか。となると、これは写真の可能性も考えるが、しかし、「紙代」とあるからには写本なのであろう。

もっとも、他人が写す場合には、その全体を写すのだろうが、自ら写す場合は全体を写すのか、次に示すように抜書なのかは必ずしも明確ではない。その点は一点ずつ調査が必要である。

抜書（抄録）は主に鳶魚自身が多く時間を使って行ったはずである。日記にも抜書をしたことが記されている。成果物は「含苞」と名付けられ、和装本に製本して大切に保管した。その一九一冊が早稲田大学演劇博物館に残されている。昭和五年六月二四日の日記に「含苞総目を改めて造る、昨今兩日を費す」⁷²と書かれているように、「含苞」にはさらにそれを検索するための総索引のようなものが作られた。もっともこの総索引は演劇博物館には所蔵されていない。⁷³

「含苞」については次の記述がある。

鳶魚翁の覚書で今は早稲田の演博に入っている「含苞」⁷⁴（総索引一冊に項目を定め、覚書は別途記録し一冊の量に溜ると一冊に製本する。索引の項目に何冊目の何丁目に記録と書込であるので、著述の際何冊目と何冊目とを取出しを利用して方式である。但記事に精粗があり更に原本を当る必要もある。また引用した原本の多くは既に散逸してしまった）⁷⁴

柴田宵曲も次のように書き遺している。

鳶翁の蔵書で我等の目に触れたものには、必ず朱点を打ったり書入をしたり

した迹がある。読過の際注意を惹いたところにするしをつけて置くと、再びその本を調べる場合、何等かの拠りどころになるといふ話であった。⁷⁵

「含苞」と総索引、さらには引用した原典、鳶魚の著作物とを対比させて検討すれば、彼の研究方法の一端を解き明かすことができようであるが、総索引がないために、その対比ができないのが残念である。しかし、「含苞」の本体から理解できることもあるに違いない。

残されたうちのごく一部を実見したにとどまるが、それでもいくつかがことが分かる。まず、筆跡が一人のものではないのは確実で、多くの人の手になるものと考えられる。使われた用紙も統一されていない。普通の和紙に墨書しているのが大部分であるが、中には升目に入った原稿用紙を使った部分もある。

形式もいろいろで、書物や文書をそのまま写していることがある。一方で、事典形式で記述されている部分もある。例えば、「含苞」第一冊の「俚諺考註」と題された「へちま」の項には次のように記載されている。

トウリと云、トはいろは歌にて、へちの間にある字ゆへ、へちまと云ふにやと秋斎問語にあり、⁷⁶

同じく、「上はむり、下はおろか」の項は次の如くである。

わか幼時によく老輩にきけり、和論語の七に民部卿局曰、かみつかたは、かならず無理をのたもふものとしれハ、うらみなし、しもつかたは、かならずおろかなるものとしれは、われにいきなりし、⁷⁷

この各項目名の上には赤インクで項目の通し番号が記入されている。

「へちま」は一六五、「上はむり、下はおろか」は一六六番である。

項目番号三二と三二一六はともに「風呂敷」の項目である。しかも、「菊岡氏の世事談綺には」から始めてほとんど同文である。ただし、あとの方が若干の修正を加えた形となっている。重複はこの項目だけではなく、この前後にわたっている。別の、元となる何かの資料をそれぞれが写したようにも見えない。項目番号三二の次の項目は「てつかば」、「ちぐはぐ」、「とはををふ」だが、この三項目には全体に×が付けられていて、その次が三三の「あにき、あねご」、次が三四の「葛藤」の項となっている。三二六の「風呂敷」のあとは三二七「あにき、あねご」、その次が三二八「葛藤」である。つまり抹消した部分を除けば、項目の排列も同じである。そこから、筆跡が異なるため、元になる資料を複数の人物が読み、それぞれが抜書したようにも取れる。この点はさらに検討が必要である。通し番号一二「一切」の項では、考証を記した全体に朱で大きな○を描き、上欄外に「失考」と朱書きしている。あとから全面的に取り消したのであろうか。

三村竹清の書簡のように、受信した書簡をそのまま貼り込んでいる場合もあり、また元資料の図を切って貼り込んでいるケースもある⁷⁸。

「含苞」第六八冊（大正一〇年九月）は目次や目録をも収めている。そこには「駿河土産目次」、「武備目録目次」、「早稲田図書館」という項目もある。「早稲田大学図書館」は、おそらく鳶魚にとって興味のある早稲田大学所蔵和古書の一部のリストである。そこには、例示すれば、「犬つれく草 元禄十八、三、利、二九八三」の形で、書名、請求記号がわかるようにしている。心覚えにするとともに、事後の調査に備えた資料を自作していることになる。

鳶魚が蓄積した資料をどのようにして探していたのかの一端は以上に見たものからある程度窺える。

鳶魚がどんな書物を読んだかについては、誤解が伝わっていることもまた日記を読むとわかる。一例を挙げてみると、森銑三が次のような発言をしている。

三田村翁の態度をよく表わしていると思ったことは、私が津田左右吉さんの『文学に現はれたる国民思想の研究』はいい本だと言いましたら、三田村翁は読まないくせに、津田君は法令をいっこう読んでいないじゃないかって（笑）⁷⁹。

しかし、『文学に現はれたる我が国民思想の研究』中巻が大正一一年三月一日に届き⁸⁰、四月一九日に読了したことが日記に書かれ、博士号を取る予定の津田の邪魔になることを懼れて途中で寄稿をやめようかと考えながら⁸¹、結局九月九日条に「津田氏の名著についての不審、六枚。読売へ寄稿⁸²」したことが知られる。この時点ではあきらかに読んでいる。

また、次のような発言もある。

松本「清張」 『旧事諮問録』なんかも読んでいますか。
朝倉「治彦」 そこまでは、わかりません。
進士「慶幹」 江戸研究の人たちの派が別なんですね。⁸³

このように話が展開してしまうのだが、鳶魚は『旧事諮問録』もまず間違なく読んでいる。「旧事諮問録一冊、共古翁へ返済⁸⁴」との記事が大正三年八月二八日条に見えるからである。借用の記事が見当たらないが、この時期、鳶魚と山中共古はよく行き来をしている。少し前に借りたものだろう。借りたら読むのが鳶魚だから、読んだと見るべきである。座談記事は

誤解を広める事例が多いが、鳶魚の日記を読んでいる朝倉のこの場合もそうである。

五、まとめ

以上に見てきたように、鳶魚はたくさん本の所在を調べ、図書館や寺院、個人を訪ねて資料を閲覧し、借用して読み、抜書をたくさん作った。それを基にして必要に応じて検索する手立てを編成していたのである。同じ本を何度読んで記憶しても、限界がある。記憶での失敗があることはこれまでにも触れたが、次のように誤った例もある。

甲子夜話を繰返すに見当らず、潭海と間違へたる也、夜になりて漸く見当る、此間違にて一日損をしたり。⁸⁵

山川浩に二妹あり。鉄砲の玉は女の打つたのも、男の打つたのも同じ、中れば必ず倒すといつて、鉄砲を提げて籠城し、後に新島裏に嫁す。⁸⁶

後者の例では、平成二五年の大河ドラマの主人公山本八重を山川浩の妹と誤認している。未発表の文章だから事実確認が不十分だった、それに最晩年の時期だからというのが理由だろうが、当然ながら、鳶魚の記憶といえども完全ではないことが明確にはなるだろう。

そこで、記憶を補う手立てをいろいろと工夫している。その一つとして、自身の所蔵している書物を探しやすくするためであろう、カード式の蔵書目録も作っていた。大正一三年八月一三日条に「鶴岡氏来りカードに蔵書目録を調製し始む⁸⁷」とあるのがそれで、このあと同月三一日まで鶴岡一人、あるいは北野一人、ときには二人そろって来てカード目録を作っている。

それ以外にも、独自の目録を作ってもいる。「御家騒動の目録を製す⁸⁸」、「相撲書類目録を造る⁸⁹」と書いているのがその例に当たる。

松本亀松の証言によれば、鳶魚は『広文庫』を所蔵しておらず、『古事類苑』もなかったのではないかと⁹⁰。『日本史籍年表⁹¹』、『小説年表⁹²』は早くに購入し、戦後には『大言海⁹³』を購入した記事もある。しかし、『国史大辞典』すら借用ですませている。⁹⁴

そのかわり、疑問があれば知っていそうな人物に尋ねて情報を得、逆に旧知のもしくは未知の人物からの質問を受けることもしばしばであった。博覧強記の三田村鳶魚にしても、自らが得た情報を蓄積し、それを探し出すための努力は並はずれたものであったと言わなければならない。

注

1 『三田村鳶魚全集』第廿五巻―第廿七巻 日記 上・中・下 中央公論社
昭和五二年 四月―六月。以下で日記を引用する際は、「日記」と略す。なお、全集未収録の日記として、昭和一九年分と、明治三十七年七月九日から四年一二月の抄録日記が存在する。前者は『演劇研究』第三二号（平成二一年三月）に、後者は同誌第三二号（平成二〇年三月）に、それぞれ柴田光彦の解説で掲載されている。

2 松本亀松、吉田幸一、朝倉治彦「鳶魚の輪講」、朝倉治彦編『鳶魚江戸学座談集』中央公論社 一九九八年二月 三六七頁。

3 「日記」上 一〇頁。

4 「日記」上 四九頁。

5 「日記」上 五〇頁。

6 「日記」上 六二頁。

7 「日記」上 六三頁。

8 「日記」上 六四頁。

- 9 「日記」上 六七頁。
- 10 「日記」上 六七頁。
- 11 「日記」中 一七九頁、昭和二年四月五日条。
- 12 「日記」上 四一二頁、大正二年七月二日条。
- 13 「日記」上 四一四頁、大正二年七月一日条。
- 14 「日記」中 二六五頁。
- 15 「日記」上 一五一頁。
- 16 「日記」下 一五一頁、昭和十四年九月三〇日条。
- 17 「日記」下 一七九頁、昭和十五年五月二九日条。
- 18 安食文雄『三田村鳶魚の時代―在野学の群像と図書館体験』鳥影社 二〇〇四年八月 九六頁。
- 19 「日記」上 二〇頁。
- 20 「日記」上 八六頁。
- 21 「日記」上 九八頁。
- 22 「日記」上 一二四頁。
- 23 「日記」上 一二六頁。
- 24 「日記」中 二五五頁。
- 25 「日記」中 二五五頁。
- 26 「日記」下 一三八頁。
- 27 「日記」下 一八〇頁。
- 28 「日記」下 二二二頁。
- 29 「日記」下 三四五頁、昭和三年一月一日条。
- 30 「日記」下 二九〇頁、昭和八年七月三日条。
- 31 「日記」上 二八頁、明治四三年六月二三日条。
- 32 「三上参次―御勿体をつけた様子」、菊池明編『三田村鳶魚遺稿 明治大正人物月旦』逍遙協会 二〇〇九年七月 一八九―一九一頁。
- 33 「日記」上 一七三頁、大正二年一月六日条。
- 34 「日記」中 二五七頁、昭和四年七月一日条。
- 35 「日記」中 二七五頁、昭和五年二月二四日条。
- 36 「日記」下 一四二頁、昭和十四年六月二三日条。
- 37 「日記」上 三八〇頁。
- 38 「日記」下 二八六頁。
- 39 「日記」下 一八一頁、昭和十五年六月一七日条。
- 40 「日記」下 三六二頁。
- 41 「日記」下 一八七頁、昭和十五年八月二八日条。
- 42 「日記」下 一九五頁、昭和十五年一月一六日条。
- 43 「日記」下 二九〇頁。
- 44 「日記」下 一八二頁、昭和十五年七月七日条。
- 45 山本博文『鳶魚で江戸を読む 江戸学と近世史研究』中央公論新社 二〇〇五年一〇月(中公文庫) 一三三頁。
- 46 「日記」上 二五三―二五四頁。
- 47 「日記」中 三四一頁、昭和七年四月一三日条。
- 48 「日記」中 三四四頁、昭和七年五月一三日条。
- 49 「日記」中 三四四頁、昭和七年五月一四日条。
- 50 「日記」中 三六一頁、昭和七年一〇月五日条。
- 51 それでも、ときには感想が書かれている。昭和二年六月一〇日条(「日記」下 四五頁)には、「暫足論読了、これは出来のよきものにあらず」のよう
に否定的な場合もあり、中でも手厳しいのが昭和十八年二月九日(「日記」
下 二七七頁)の『山本常朝』への批評で、「愚書」と断じ、文部省推薦図
書となったことを、「文部省は何を以て推薦せしか、馬鹿気切つたる事也」
とまで罵倒している。
- 52 「日記」上 五七頁、明治四四年三月二七日条。
- 53 「日記」下 一九頁、昭和一〇年五月三一日条。
- 54 「日記」中 八九頁、大正一三年二月七日条。
- 55 「日記」下 一三一頁、昭和十四年三月一九日条。
- 56 「日記」下 一三九頁、昭和十四年五月二四日条。

- 57 「日記」下 二九五頁、昭和一八年八月二一日条。
 58 「日記」下 二九六頁、昭和一八年八月二五日程。
 59 「日記」上 八五、八七頁。
 60 「日記」上 四一二頁、大正二一年七月四日程。
 61 「日記」下 一九〇頁、昭和一五年九月一八日程。
 62 「日記」中 五一頁、大正一三年二月八日程。
 63 「日記」中 一八一頁、昭和二年四月二三日条。
 64 「日記」中 六四頁、大正一三年五月二〇日程。
 65 「日記」中 六九頁、大正一三年七月二日程。
 66 「日記」中 一八九頁、昭和二年七月二三日条。
 67 「日記」中 三八九頁、昭和八年八月九日程。
 68 「日記」下 二三四頁、昭和一六年一月三〇日程。
 69 「日記」中 二二〇頁、昭和三年五月三〇日程。
 70 「日記」下 二五六頁、昭和一七年七月一六日程。
 71 「日記」下 二五五頁。
 72 「日記」中 二八五頁。
 73 柴田光彦「演劇博物館蔵 三田村鳶魚旧蔵資料の研究―「含苞」を中心として」(http://www.waseda.jp/pj-empaku/jp/project/pdfs/02_report.pdf)
 二〇一三年九月二九日最終閲覧)

- 74 小川恭一「柳営学」の人々(一) 三田村鳶魚翁と中川忠英、『日本古書通信』八一六号 七頁。
 75 「鳶飛魚躍」、『柴田肖曲文集』第七卷 小澤書店 一九五二年一月 五一八頁。
 76 「含苞」第一冊 二〇三頁。和装本であり、一枚の紙の表側だけに墨書して二つに折り、束ねているから、本来は丁で示すべきであるが、各丁の表裏それぞれにナンバーが打ってあるため、その数字を頁として示す。
 77 同右 二〇四頁。
 78 「五 女髪」、「含苞」第七一冊(大正二二年)にそれが見られる。
- 79 「鳶魚と江戸随筆」、朝倉治彦編『鳶魚江戸学 座談集』中央公論社 一九九八年二月 二九七頁。
 80 「日記」上 三九七、四〇一頁。
 81 「日記」上 四一頁、大正一一年六月二八日程。
 82 「日記」上 四二二頁。記事は、三田村鳶魚「津田左右吉博士の大作に関する不審」、『読売新聞』大正一一年九月二五日期刊 七頁。なお、ここでは津田の著作の書名を『文学に現はれたる国民性の研究』と誤記しており、また法令に関することは触れられていない。
 83 「鳶魚江戸学」、朝倉治彦編『鳶魚江戸学 座談集』中央公論社 一九九八年二月 二〇一―二二頁。
 84 「日記」上 一九九頁。
 85 「日記」下 二四三頁、昭和一七年二月一〇日程。
 86 「法華三昧」、『三田村鳶魚全集』第廿七卷 中央公論社 昭和五二年六月四二―四三頁。
 87 「日記」中 七六頁。
 88 「日記」中 三九五頁、昭和八年一〇月一四日程。
 89 「日記」下 三九三頁、昭和二四年一月一一日条。
 90 「鳶魚の輪講」、朝倉治彦編『鳶魚江戸学 座談集』中央公論社 一九九八年二月 三七八頁。
 91 「日記」上 一三九頁、大正二二年一月六日程。
 92 「日記」上 一四一頁、大正二二年一月二一日条。
 93 「日記」下 三五六頁、昭和二三年六月三〇日程。
 94 「日記」上 二九八頁、大正七年六月一七日程。

◎文献の引用にあたって、旧字体は新字体に改めた。